



## ～お葬儀屋さんのひとりごと～

### もし家族に何かあったら・・・

#### 第2章 家族が死の宣告を受けたら

##### ■ がん告知のむずかしさ

がん告知は大変にむずかしい。特にがんの進行の度合いにより、進行が進んでいればいるほど、本当のことを告げることはむずかしいものです。告知することの必要性・重要性が説かれているにもかかわらず、実際に告知されている例はそんなに多くありません。厚生省の「人口動態社会経済面調査」によると、がんで死亡した患者のうち、本人が「告知を受けた」のは18.2%、「察していたと思う」が42.5%、「最後まで知らなかったと思う」が25.1%で、患者の年齢が高いほど告知率が減少しています。告知した人は医師が7割で、あとは家族からです。また告知した場合、介護者の58.7%が「知らせてよかった」と答えたといえます。

このように告知率はまだ2割に達していない状況にあります。その理由はいくつかあるでしょう。患者自身よりも、家族が「がん」の現実には圧倒され、どうしてよいかわからなくなります。また、「告知」をした場合にも、患者が受ける精神的ダメージを考えると、どう対処したらよいかかわからないからだと思います。

病名を初めて知らされるのは病人自身ではなく、配偶者なり、その病人の近くにいて経済的にも精神的にも面倒を見る立場にある者ということになります。

そうした立場の人が「家族の死」の可能性を知らされると、自分ではどうしたらよいか判断がつかなくなります。「可哀相」という思いでいっぱいになり、その瞬間からこれまでの楽しい生活が一転して暗いものになります。もはや家族の間では、病気のことは語られなくなり、本人が「病名」を聞きたいと言っても、あたかも何事もなかったかのように「その場」が取り繕われます。

そしてこの時の一時的な「嘘」があとに尾を引いて、最後まで真実を語ることが出来なくなるという経過をたどる場合が多いのです。

#### 宣告の日から [群馬県 主婦 65歳]

父の主治医は父の教え子であった。何でも話せる仲であったので、医師は父に、皮膚ガンで半年の命であることを宣告した。

周囲の心配をよそに、父は顔色ひとつ変えず、黙々として死への準備にかかった。まず、本。その他身のまわりの整理であった。次に家族旅行。青葉の頃、家族で汽車（当時）に乗り軽井沢へいった。それから、数名の親友を招いた。父も割合元気であったのでお酒を飲み、調子はずれの声で歌も歌った。そんな父を見て、誰も死のくることを信じなかった。父は、友人をバス停まで送っていったが、その友と再び顔を合わせることはなかった。

村では人が死ぬと、近所の人や親せきや知人の所へ告げにいった。父は、その人の通る道まで記し、ここは近道だが道が悪いなどと、こまかな説明までつけた。葬儀次第も、よくわかるようにノートに記した。また葬儀に必要なものに写真と棺がある。父は自分で町へ出かけ、写真の引き伸ばしを頼み、棺の注文もした。棺を頼む時、お店の人に「ご愁傷様でございます。どなたがお亡くなりになりましたか？」と聞かれたので、「ここにいるおれだよ」といったら、相手は目を丸くしていたのである。

限られた半年の後半は寝たきりとなった。そして、秋11月、父は静かに息を引き取った。しかし、父の死はガンと戦った壮絶な戦死のように私には思えた。

人は誰でも死ぬ。それはいつくるかわからない。現にこの3月、私の弟が心筋こうそくで急死してしまった。葬儀に出席した時、死への準備も必要であることを痛感した。

（父のように立派なことはできないが残る人達に迷惑をかけないようにしたい……）誰にも言えないけれど、心の中に私はそっと思った。

